

IVY-2000-8-1

2000年8月30日

カンボジア スバイリエン州農村女性組合設立支援事業
 99年度完了報告書
 (1999年7月1日～2000年6月30日)

1 事業の総費用額等

総費用額 10,834,038 円

(内訳) 自己資金額 4,441,038 円 郵政省国際ボランティア貯金 6,393,000 円

自己資金額の割合 (自己資金額÷総費用額) 40.99%

2 援助事業の実施状況及び効果

【援助事業実施の背景と概要】

IVY では本スバイリエン事業の前に、96 年 3 月より 4 年間に亘り、カンボジア カンダール州スアーン郡コー島元ホームレス再定住センターにおいて、プノンペン市内で路上生活を送っていた家族に対して農業を核とした自立支援を行ってきた。現在はほとんどの家族に自立のめどが立ちプロジェクトの終了も目前だが、この事業で IVY はカンボジアの最貧困層の人々や農民の厳しい実情を知るとともに、試行錯誤の末、その自立成功に向けて多くのノウハウを蓄積することができた。

そこで、99 年 7 月からは、これまでに蓄積した経験・ノウハウを生かし、カンボジアの最貧困地帯において農民のホームレス化を未然に防止する活動を展開することになった。村の女性たちに組合活動を通じてコミュニティ内の相互扶助力を高めてもらおうというものである。

対象地区は、プノンペン市から南東に 130KM、ベトナムとの国境線沿いに位置するスバイリエン州である。スバイリエン州は酸性の痩せた土壌で、近くに水源もなく、米の収穫率は 10 アールあたり約 80kg と他の州の平均に比べ半分しかない。また一家族当たりの耕作面積も狭く、農民の多くが雨季にはプノンペンなどの都市に出稼ぎに行く。またプノンペン市の路上生活者の中でもスバイリエン州出身者は上位 4 番目に位置し、さらにプノンペン市に隣接しない州としては第 1 位であることなどから選ばれた。

本事業は、村の女性をメインターゲットにしているのが特徴だが、その理由としては、スバイリエン州では先にも述べたように男性人口の都市への出稼ぎ流出が多いため普段村に残っているのは女性であること。また元もと女性の男性に対する比率が極めて高いこと。さらに未亡人家庭が多く、女性が主たる家計を担う家庭の割合が極めて高いこと。また未亡人家庭ほど貧困に陥りやすくホームレスになる率が高いなどの傾向が見られることなどが挙げられる。そこで、農民のホームレス化の防止には、村の女性達自身を活性化・組織化することにより、自らが主役となって身の回りの生活改善に取り組んだり、女性同士の相互扶助力を高めることが最

も確実に有効な方法であると考えたからである。

また、組合の設立や運営にあたっては、IVY が主導し、住民がそれに従うという受身の形ではなく、まず女性達に「開発とは住民が主役である」「IVY も対等の立場である」ことを理解してもらうとともに、PRA やワークショップなどの手法を使って彼女達が調査、分析、計画、決定、評価などすべてのプロセスに参加しやすくなる環境作りに努めている。

なお、99 年度、スパイリエン州で初の女性組合を無事誕生させることができおり、2000 年 8 月現在は 2 村目の設立に着手しているところである。

【事業実施状況概要】

| | |
|-------------------------|--------------------------------|
| 7 月初旬 | キーパーソンとのミーティング、準備委員の選出 |
| 8 月初旬 | 準備委員会メンバーとのワークショップと広報活動の開始 |
| 9 月初旬 | 選挙管理委員会発足 |
| 9 月中旬 | 村の全女性対象ワークショップ・女性組合発足 |
| 9 月下旬 | 女性リーダー選挙 |
| 9 月下旬～10 月中旬 | 家庭菜園プログラムベースラインサーベイ |
| 10 月中旬～11 月中旬 | 女性リーダー養成講座 |
| 12 月初旬～1 月初旬 | 女性組合同規約作成、プログラム企画 モデル家庭菜園設置 |
| 1 月中旬 | 設立総会 家庭菜園ボランティア選出 |
| 1 月下旬、3 月初旬、3 月下旬、5 月中旬 | 家庭菜園ボランティア対象家庭菜園講座・勉強会 |
| 2 月初旬、3 月下旬、6 月中旬 | 全組合員対象家庭菜園講座（家庭菜園開始） |
| 2 月中旬 | 家畜購入のための貯蓄講座 |
| 3 月～8 月 | 家畜購入のための貯蓄実施・家畜飼育開始 |
| 4 月下旬、5 月下旬、6 月下旬 | 家畜飼育講座 |
| 4 月中旬～ | 家畜飼育訪問指導 |

【活動実施内容詳細（月別）】

7 月

●スパイリエン州事務所開設

スパイリエンでの新プロジェクト開始を踏まえ、その活動拠点となる事務所をスパイリエン州都に開設。

●カンボジア人プロジェクトスタッフ雇用

スパイリエン事業のカンボジア人スタッフでディレクターレベルに当たるスタッフ ヨス・ナを雇用。このスタッフは農村に住み込んでの NGO 活動の経験があり、また優れた英語でのコミュニケーション能力もあり、IVY にとっては貴重な存在である。

●キーパーソンとのミーティング

村長、地区長、郡長などと話し合い、情報収集を行う。また、活動地域のリーダーからは女性組合準備委員として IVY に協力してもらえる女性候補を挙げてもらう。

●女性組合準備委員選出

3 月以来の調査およびキーパーソンとの今後の活動の進め方についての話し合いの結果、村で正式に活動を始めるためには女性組合を発足させ正式な役員を選出してからのほうが、住民にとっても IVY の活動が正式なものとして受け入れられやすいことが挙げられた。そこで女性組合を活動初期の段階から発足させることとし、これに伴い IVY スタッフが村長や村の女性から信頼のある、女性リーダー候補となるような女性を面接し、正式な女性組合発足までの準備委員として 5 名を選出した。

8 月

●専門家派遣

8 月 2 日から 7 日までイギリスの大学院で開発学を学んだ堀江由美子氏を迎え、現地での住民参加型調査・ワークショップ手法についての研修の他、女性組合準備委員に対するワークショップの内容について指導を行ってもらった。

●女性組合準備委員に対するワークショップ

8 月 5 日、上記に述べた準備委員に対するワークショップを行った。これまで公の場で自分の意見を述べたり、考えをまとめるという経験をするチャンスがあまりなかった女性達にとって、いわゆる会議形式の話し合いは不向きである。従ってこのワークショップでは参加型と呼ばれる手法を豊富に取り入れた。ゲーム感覚を取り入れた手法によって自己紹介をした後、山形や日本のポスターを見ながら自分達の住む地域と他の地域を対比することにより自分達の住む環境を見つめ直すきっかけを作った。またシズナルカレンダーという手法を使い、天候、行事、農業、物価、病気などの項目に沿って自分達の一年の生活サイクルを視覚化した。これによって問題の発生しやすい時期や問題の相関関係などがはっきりし、またそれらの問題に対する解決策を自分達自身で考えてもらうきっかけとなった。勿論、問題は女性達だけで解決できるわけではないが、その問題解決機関として「女性相互扶助組合が必要」との意見が彼女達自身より挙がってきた。

●カンボジア人フィールドスタッフの雇用

女性対象の活動により密着して関るためには、カンボジア女性スタッフの存在が不可欠ということで、8 月から 3 ヶ月の仮採用を経て新スタッフを雇用。このスタッフは主にフィールドで女性達と共に活動するスタッフであるが、その気さくな雰囲気から村の人々からの信頼も厚く、女性達の生の声を吸い上げることのできる貴重な人材である。

●カンボジア人農業専門家のパートタイム雇用

IVY による栄養講座及び家庭菜園トレーニングを担当する専門家として、スパイリエン農林水産課に席をおく女性をパートタイムで雇用。

●本部スタッフカンボジア渡航

IVY 本部スタッフが 7 月 26 日から 8 月 10 日まで渡航、これまでの事業の進捗状況管理と今後の進行日程などについて現地スタッフと調整を行った。

9 月

●村の全女性対象ワークショップ

9 月 14 日から 16 日の 3 日間にわたり、村の全世帯の女性対象にワークショップが行われた。村全体を 3 地区に分け、一日一地区ずつワークショップを行った。事前に準備委員が各地区を回り参加を呼びかけたお陰で病気の人を除き、村の 18 歳以上のほとんど全ての女性が参加した。また当日は準備委員が受け付け係やゲームのアシスタントを務め、村長自らが自転車で村を回り村の女性達に参加の呼びかけを行うなど、ワークショップ運営に関しても積極的な住民の参加が見られた。

このワークショップの目的は 1) IVY の紹介と女性達がお互いのことをよく知り合う、2) 村が抱えている問題を認識する、3) それらの問題を解決する機関として、女性組合の必要性を確認し、具体的な組合役員選挙の日程を決める、というものであった。

一度に 30 人以上の読み書きのほとんど出来ない女性達を対象にしたワークショップであるため、ポスターや絵カードを多用し、誰にでも分かりやすく、楽しめる内容にした。

●女性組合発足で合意

ワークショップで村の問題の所存を明らかにする話し合いを行った結果、女性達はお互いに協力し合うための組織作りを行うことが大切だという結論に達し、女性組合を設立することで合意した。

●女性組合リーダー選挙

9 月 28 日に女性組合のリーダーを選出する選挙が行われた。選挙に先だって、村長、地区

長、村の年寄りで相談役格の男女それぞれ一人ずつが入り、IVY スタッフと共に選挙管理委員会が結成された。これらの委員は、選出方法の取り決め、選挙ポスター作り、選挙当日の会場設営、投票用紙の作成、当日の選挙の立会い、開票などを行い、住民の間で強い要望のあった自由かつ公平な選挙にするために貢献した。この選挙によって正式に 5 名の女性組合リーダーが選出された。

●家庭菜園プログラムベースラインサーベイ

家庭菜園プログラムを行うにあたって、8 月に雇用した農業専門家が、村の女性に対して更に詳しい栄養摂取状況、健康状態、住居や生活環境の調査を行った。これらの現状を分析し、今後栄養講座や家庭菜園トレーニングにおいて、どの程度の内容から始めるのか、といった具体的な講座のカリキュラム作りが行われた。

10 月

●女性リーダー養成講座

9 月の選挙で選出された 5 名の女性リーダー達に正式に集ってもらい、村の問題を認識し、組合の今後の活動予定などを話し合いながらリーダーとしての意識付けを行っていくための養成講座を 10 月 19 日、11 月 5 日、11 月 9 日の 3 日間に渡って行った。

第 1 回養成講座（10 月 19 日）ではまず村での問題を挙げ、その深刻さに応じて各自がランキングを行った。その結果上位に挙げた問題としては現金収入を得る機会がない、土地がやせていて収量が少ない、栄養不足、家畜の病気や最初を買うための資金不足などがあった。次にそれらの問題をどうしたら解決出来るかを各自が 1 枚のカードに 1 つずつ、思いつく限り書き出した。そして「自分達で出来ること」という観点から、家庭菜園と家畜飼育なら女性達が取り組みやすいとの意見が出され、次回にさらに詳しく話し合うこととなった。

11 月

●第 2 回・第 3 回女性リーダー養成講座

第 2 回養成講座（11 月 5 日）では組織の運営上最も大切なルールとして、意思決定の方法が決められた。結果、5 人中 3 人の出席で 3 人の賛成があれば可決と決定した。次に前回出された家庭菜園と家畜を組合の初年度の事業にしていかに決めることになり、全員一致で可決された。

次に活動として取り組むこととなった家庭菜園の話に移り、まず栄養バランスの大切さ、特に緑黄色野菜の大切さを知ってもらうための栄養講座を行った。その結果、栄養の観点からも家庭菜園に取り組むことが大切だという新たな視点も加わった。また、その普及方法として、家庭菜園に興味がある人をボランティアとして募り、農業指導員よりトレーニングを受けながら、自分の菜園を使って近所の人に普及していく、というアイデアも出された。その他、IVY には種の援助が要請された。

第 3 回養成講座（11 月 9 日）では家畜飼育で挙げた「最初の資金がない」という問題について、借金ではなく自分達で資金を作る方法を二通り、IVY から提案した。その一つは毎週各自が一定額を積み立て、それを組合が預かり、帳簿に記録する。一定の額に達したら組合（IVY）が一部助成し、家畜を買うことができる、という方法。二つ目は 5 人グループを作り、毎週一定額を出し合い、目標の家畜の額に達したら順番にもらっていける方法。最後の人がもらえるまで全員が出資を続けて行く。説明だけでは分かりにくいため、ゲーム仕立てにしてシミュレーションを行った。どちらの方法が女性達にとってやりやすいかを考えてもらい、具体的な方法はさらに詰めることとした。

12 月

●女性組合同規約作り、各プログラム企画

12 月 3 日、12 月 9 日、1 月 6 日と引き続き女性リーダー達と会議を持ち、女性組合総会に向けての準備・規約作り、及び家庭菜園普及と家畜飼育普及のための各プログラムの内容を詰めた。

●農業アドバイザー来訪

農業専門家の菅原庄市氏を迎え、現地土壌調査、モデル家庭菜園の設計、家庭菜園プログラムの立案、農民からの聞き取り調査などを行ってもらった。実践的な指導を受け、スパイリエンの農業の問題点や課題が明確になった。

●モデル家庭菜園設置

12 月より、村の人々に新しい技術や珍しい野菜などを見る機会を作ることで啓蒙を図り、また講座の際に実技トレーニングを行う会場として使用するためのモデル家庭菜園の設置を開始した。村内の適宜な場所にすでにある家庭菜園を一ヶ所選び、モデル家庭菜園になってくれることを依頼し、使用させてもらうこととした。設置にあたっては農業専門家菅原庄市氏のアドバイスを受けた。

1 月

●女性組合設立総会

1 月 20 日、12 月より準備を進めていた女性組合の総会を行った。100 人近い出席者があり、女性組合発足宣言、女性リーダー承認、規約承認、事業承認などが行われた。その後正式に組合員登録を行い、更に女性達によって承認を得た活動を進める上での家庭菜園ボランティアを募った。女性リーダー達にとっては初めての大きな行事であり、大勢の人の前で話をしなければならないというプレッシャーがあったにもかかわらず、みんなきびきびと役割をこなし、自信をつける良い機会となった。

●家庭菜園ボランティア選出

総会で募集された家庭菜園ボランティアへの応募者に対し、8月の家庭菜園プログラムベースラインサーベイをもとに、聞き取り調査を行って意志を確認し、20名の家庭菜園ボランティアが選出された。ボランティアは「自宅の家庭菜園を近所の人達に見せて啓蒙を図る」、「トレーニングの会場として庭を使う」、「トレーニングによって得た種子の保存技術を使い、野菜の種子を増やし、近所に配布する」などの役割を果たす。ボランティアは村の各地域からバランスよく選出された。

●家庭菜園ボランティア対象家庭菜園講座

1月25日及び26日、全組合員対象の家庭菜園トレーニングにさきかけて20名の家庭菜園ボランティア対象のトレーニングを行った。トレーニングは栄養講座と実地トレーニングの2部に分け、まず栄養摂取面から野菜の重要性を理解した後、モデル家庭菜園で実践的な技術を学ぶという構成で行った。実例や絵カード、写真などを見ながらQ&A、ブレインストーミングなどによって、ボランティア達がすでに持っている知識を引き出しながら、彼女達自身が問題点や解決方法を発見し、考えていける内容とした。

2月

●全組合員対象家庭菜園講座

2月1日～3日までの3日間にわたり、全組合員を対象にしたトレーニングを行った。内容は先に行われた家庭菜園ボランティア対象のトレーニング同様、前半は栄養講座、後半は実地トレーニングという2部構成で行った。このトレーニングには合計約80人の女性が参加した。その後3月にこのトレーニングに参加できなかった女性7名にも新たにトレーニングを行い、さらに農業指導員が女性達の家を訪問して普及状況を把握し、技術面の疑問に答えたり、指導を行うことでトレーニング内容の定着を図った。

●家畜購入のための貯蓄講座

2月9日～11日には家畜購入のための貯蓄の仕組みを理解するための貯蓄講座を行った。この仕組みでは参加者が5人1組でグループを作り、各グループが豚、鶏など貯蓄目標を決めて一定額を一定期間に貯め、一定額に達したら組合（IVY）より購入助成金が支給され、希望の家畜を購入することができるというもの。3日間で約80名の参加があった。Q&A、絵カードや図を使ったロールプレイなどを通して、家畜飼育貯蓄のやり方を実際に体験してもらった。その後、早速グループの登録を開始した。またこの貯蓄講座に参加出来なかった女性達の為にその後3回の追加講座を開き、3月末の時点で豚貯蓄グループ12、鶏貯蓄グループ2つの登録があった。

3 月

●家畜購入のための貯蓄

女性達との話し合いにより、貯蓄金の集金は毎月 1 日と決められ、3 月 1 日には第 1 回目の集金及び購入のための助成金支給を行った。集金・支給の実務は女性リーダーの担当者により行われた。その後、第 2 回目、第 3 回目と毎月 1 日に貯蓄集金及び助成金支給を行い、各グループより毎月一人ずつ、順番に豚または鶏を購入していった。助成金支給から 1 週間後には家畜が無事購入されたかのチェックを行い、購入した家畜には目印をつけ、売却までの間、経過を調査することとした。

●家庭菜園ボランティア勉強会

3 月 2 日、家庭菜園ボランティア達を対象に、1 月末のトレーニング後の状況を話し合うための勉強会を行った。野菜の育て方や害虫についての問題が出され、お互いにどのような対策を取っているのか話し合った。その後、家庭菜園ボランティアの家庭を何軒か訪問し、それぞれの菜園を皆で見学した。

●家庭菜園ボランティア対象家庭菜園講座

3 月 23 日、第 2 回目の家庭菜園講座を行った。前回の勉強会で女性達から出た質問や問題に応え、実践で自然農薬の作り方、使い方などのトレーニングとなった。

4 月

●家畜飼育講座

4 月 21 日、5 月 26 日、及び 6 月 29 日に貯蓄グループで豚を購入した人、または購入予定の人に向けたトレーニングを行った。内容は購入の際の豚の選び方、餌のやり方、世話の仕方、病気の対処法等で構成され、Q & A で女性達の経験や意見を引き出し、活発にやりとりしながらのトレーニングとなった。その後、指導員が随時訪問指導を行って、トレーニング内容の定着を図ると共に家畜飼育の現状を把握するよう努めた。

5 月

●家庭菜園ボランティア対象家庭菜園講座

5 月 12 日に家庭菜園ボランティアに対する第 3 回目の家庭菜園講座を行った。季節柄、マンゴーを中心とした内容で何種類かのマンゴーの試食会の後、良い種の見分け方、発芽のさせ方、移植の方法などの実地トレーニングを行った。

6 月

●全組合員対象家庭菜園講座

6 月 14 日から 16 日、全組合員対象に第 2 回目の家庭菜園講座を行った。雨季の到来に向

けて、雨季に適した野菜の育て方を Q & A、絵カード、小グループでのディスカッションなどを通して確認した後、モデル家庭菜園にて実地トレーニングを行い苗や種を配布した。3 日間での出席者は約 90 人と高い出席率となった。また、このトレーニングでは女性リーダー及び家庭菜園ボランティアにファシリテーションの一部や補佐、小グループでのまとめ役などをしてもらった。その後農業指導員がフォローアップで参加家庭を回ったところ、ほとんどの家庭でトレーニングで学んだ通りに栽培を始めており、講座内容の高い定着度を確認することが出来た。

●女性リーダー会議

1 月の女性組合発足以来、随時女性リーダーと会議を持ち、プログラムの企画、進捗状況報告、情報交換などを行ってきた。会議の準備、司会、進行などはできる限り女性リーダー達自身が担えるように I V Y が補助する割合を徐々に減らしてきた。6 月に家庭菜園普及及び家畜飼育普及の二つのプログラムの評価を行い、その成果及び問題点を話し合ったところ、家畜の病気の問題、村の貧困層の人々への普及の難しさなどの問題点が挙げられた。これを受けて家畜に対するワクチン接種のシステム作り、最貧困層の参加率を向上させる方法、身寄りのなお年寄りへの支援などが現在引き続き話し合われている。

【援助事業の効果】

今まで村の中での活動の場が限られていた女性が、自分達のグループを作って活動を行うことにより、女性達の中には明らかに自信と活気が生まれてきた。最初は人前で話すことを恥ずかしがっていた女性達も、ワークショップやリーダー養成講座などのトレーニングの成果により、総会などで無事進行役を果たしたり、堂々と村の問題や将来の希望について語るようになってきた。こうした試みはスパイリエン州でも初めてのことで、地方開発課や女性課から出席した来賓も、農村の女性達の変化と潜在力に驚いており、他の地域での展開に強い期待が寄せられている。

農村女性の意識の活性化は、男性が街に出稼ぎに出でしまっている期間、村の運営をしていく上で重要であるし、また村の諸問題を解決していく上で、これまでの男性中心の考え方、対処方法に新しい方向性を見つけることが出来る。

また、女性達の意識が変化しただけでなく、実際の家庭菜園普及活動や家畜普及活動も貧困解決に既に成果を出し始めている。家庭菜園普及活動では、自ら志願した 20 人もの家庭菜園ボランティアが I V Y 指導員の指導、また自分達の情報交換によって研修を重ね、自分達の庭を近所の人達に見てもらおうなどして他の女性達にも 2 段階で広めようとしている。I V Y がトレーニングで配布した種ですでに何度も収穫期を迎えた野菜もあり、種子を女性達が収穫・保存することによって持続的な家庭菜園、一年を通して野菜が食べられる家庭菜園が多くの実現しつつある。家庭菜園で取れた野菜を摂取することにより、栄養向上にも成果を見せ始めており、「病気をしなくなった」、「田んぼでも元気に働けるようになった」などの声が聞かれ、

野菜を食べることの重要性を肌で感じている様子が伺える。さらに「野菜を買わずに済むようになった」、「余った分を売れるようになった」と家計への助けとなる効果も現れている。

家畜貯蓄普及活動では、14 グループ、合計 70 人の女性達が貯蓄プログラムに参加し、全員が予定通り貯蓄を成功させ、子豚や鶏を購入することが出来た。この成功によって、まずグループ内に信頼関係や相互扶助関係が生まれている。また、女性達が自分自身だけでなく、子供や親も含む家族全体にとって有益な活動、家畜飼育に資金を使うことが出来るようになった。IVY 指導員が飼育の方法や病気の予防方法などについての研修を重ね、女性達も小屋を作ったり餌を改善したりと熱心に飼育している。最初に購入した女性達の豚は 10 月頃には売れる大きさとなり、家庭に大きな収入を持たらすであろう。一方、村で豚の病気が蔓延したこともあり、せっかく買った豚が病気にかかり、死んでしまったという女性達も何人か出てきた。また貯蓄プログラムに参加したくてもできなかった最貧困層の人々もいた。この問題は女性リーダー会議でも議題となり、現在彼女達を中心に家畜に対するワクチン接種のシステムや、女性組合より家畜を貸し出すシステム作りが行われているところである。

これらの活動では何よりも女性達が楽しんで家庭菜園や家畜飼育をやっている姿が印象的である。たとえ小さなことであっても、自分で何かをするということは女性達にとって大きな自信につながる。男性も女性が新しい知識を身につけることに協力的で、男性の間でも IVY の村での活動は快く受け入れられている。実際、家庭菜園による栄養向上や家畜飼育による収入向上は村にも家族にも直接恩恵をもたらすものであるため、女性達は現実に裏付けされたさらなる自信を得ることができる。

組合活動をきっかけに村の女性同士の交流が活発になり、助け合いの精神も自然に根づきつつある。村の貧困層の人々に対する支援が自発的に話し合われるなど、自分だけが裕福になるのではなく、村の人々と共に問題に取り組もうとする姿勢が見られるようになってきた。

【今後の課題】

IVY スパイリエン事業は 1 村 3 年間の活動サイクルを予定しているが、1 村目での 2 年目、3 年目は、引き続きこれまでの家庭菜園や家畜貯蓄プログラムを継続・発展させながら、将来女性達が中心となって女性組合を自主運営できるように IVY がこれまで担ってきた牽引の役割を彼女たちに徐々にシフトさせていきたいと考えている。

しかし、1 年を経て、女性リーダー 5 人の中には少し興味が薄れ始めている者が出て来ている。活動が忙しすぎてそれが負担になったのではないかと考えがちだが、話し合いや活動への出席率の高い人ほど意欲も持続している。参加すればするほど、組合の意義、また自分達の役割への認識を深めることができ、徐々に動機付けにもつながって自発性が養われていくようだ。逆に出席率の低い人の原因は、直接的な原因として「報酬の得られない活動に家族の理解が得られないので乳児や仕事のフォローを頼みにくい」などが上がっているが、最初の動機付けの段階でリーダーの自覚を育めるようもっと十分に時間を取るべきだったというのが反省点であ

る。（この教訓は 2 村目に生かしていきたい。）

そこで、リーダーシップトレーニングを座学中心から住民との関係を深めることができるようなものに変更して行っていくほか、側面支援として、

- ・ 夫や村の長老対象に女性組合の活動の意義や目的を説明する会を開き、協力を促す。
- ・ 村人の中には、まだどの人が女性リーダーかよく知らない人もいるので、掲示板に彼女たちの写真を貼って紹介することでリーダー自身に自覚を深めてもらう。

などのアイデアが出されている。

また、家庭菜園ボランティア 20 人の集まりの自立促進のための組織化も課題として出されている。IVY 農業スタッフがこれまで住民対象トレーニングについて計画から実施まで取りしきっていたが、ボランティアたち自身でトレーニング計画を立てたり、普及作物を選定したり、自分達の活動を評価できる体制作りを行っていく方向で話を進めている。1 年目は自分の家庭菜園の充実や技術の向上に関心が留まった人が大方だったが、近所の人々への指導や作業補助などを行うことによって、女性組合本来の目的である「助け合い」の精神が広まるのではないかと考えている。

また、村の女性たちの間にも、女性組合の趣旨や目的がまだよく浸透しているとは言えない現状である。「女性組合は自分達に物をくれたり何かをしてくれるところ」という一方的な受益者であるという誤解も一部にはあるようだ。

そこで、家庭菜園ボランティアなどへのより多くの女性の参加を呼びかけるとともに、リーダーがそれぞれの地域や家庭へ直接足を運んで、説明を行いながらより多くの人々の声やアイデアを活動に反映させていけるようにしていきたいとの意見が出されている。

4 現地の人々の反響・意見

【各プログラムの成果・問題点（KJ 法によるディスカッション）】

*6 月 23 日(金) に開かれた女性組合委員会での評価より

<家庭菜園プログラム>

成果—種が入手できた、野菜を沢山食べるようになった、野菜を買わなくて良くなった、健康になった、野菜を育てる知識が得られた、等。

問題点—水源がなくて特に乾季は困る、柵がない、土地がない、忙しくて時間がない、怠けグセが直らない、肥料用の資材がない、家畜が食べる、等。尚、今年は特に例年に比べて雨が多く、植えても水浸しになって腐ってしまう。

問題点の解決策—IVY にさらにトレーニング・フォローアップをしてほしい。自分達も近所の人達にもっと薦める。コンポストを作るために台所のゴミをためる、家畜の糞は乾季に田んぼ

からも集める、等。

<家畜貯蓄プログラム>

成果－貯蓄ができた、豚・鶏が買えた、助成金のおかげで豚を買うことが可能になった、豚の飼育法についての知識が増えた、IVY の緊急支援のおかげで口蹄疫の被害が最小限に食い止められた、等。

問題点－豚の病気、薬がない、金がないため薬が買えない、貯蓄グループを作りたくても作れない人がいる、最貧困層にとって貯蓄は不可能、等。

問題点の解決策－IVY に病気の対処法のトレーニングをしてほしい、薬の使い方のトレーニング及び薬をサポートしてほしい、貯蓄グループを作りたい人を女性リーダー達が助ける、等。